

「現代の卒業式で歌われる楽曲」の調査報告

— 卒業式と「仰げば尊し」を中心に —

田 中 克 己

序 論

プロローグ

明治18年(1885)7月20日午後、上野公園内の文部省館において、音楽取調所の第1回卒業演習会が執り行われた。この日、卒業を迎えたのは、市川道(1868-?)、幸田延(1870-1946)、遠山甲子(1866-?)、の女性3名である。明治13年(1880)10月の創設時(この段階では「音楽取調掛」という名称)の入学者が22名、さらに幸田延については第3回(1882)入学者であるから、〈音楽ノ事タル其学芸ノ高妙ニシテ学ヒ易カラサルニヨリ能ク耐フルモノ少キ〉(『官報』、1885.7.22)と、当時の音楽取調所長であった伊沢修二(1851-1971)が記すように、その数は少ないと言わざるを得ないだろう。

そのプログラムを見ると、第一部「唱歌」の項に「仰げば尊し」の名を見出すことができる。「仰げば尊し」の初出は、明治17年(1884)に公刊された『小学唱歌集』第三編(文部省音楽取調掛編纂)であるから、この卒業演習会が専門家の手による「仰げば尊し」の実質的なお披露目公演となった。そこでは、在校生による箏(野中武雄・高田銆)や胡弓(傍島萬年)といった弦楽器が伴奏として使用され、声高らかに「仰げば尊し」が歌われたことだろう。これを機に、「仰げば尊し」は、卒業式の定番曲となっていくのである。

目的・意義

卒業式の定番曲といえば、「仰げば尊し」と「蛍の光」が想起されるが、現在の学校でもなお歌われているかどうかについては、はなはだ疑問である。学校教育の中で、卒業式は「学校行事」(特別活動)の「儀式的行事」に分類され、〈その意義を踏まえ、国旗を掲揚するとともに、国歌を斉唱するよう指導する〉(『学習指導要領』平成10年告示)とされるのみで、国歌以外の歌については自由度が高く、それゆえに流動的である。例えば、卒業学年が使用する音楽教科書を見ても、「仰げば尊し」や「蛍の光」以外にも、小学校では「さようなら」「さよなら友よ」、中学校では「大地讃頌」「旅立つ季節」、のような卒業式を意識した楽曲が載録されている。

そこで本稿では、現在の卒業式で歌われる楽曲についての調査・考察をおこないたい。その主な内

容は、「仰げば尊し」や「蛍の光」が歌われているのかどうか、また、それ以外の楽曲では何が歌われているか、である。合わせて、それぞれの選曲理由についても、確認していきたい。そうすることで、卒業式と「仰げば尊し」の関係性、さらには、卒業式における合唱の意義について、明らかにしようとする。

構成・概要

以上を考察するため、全体を3章構成とした。「1. 調査の概要」では、全国の国公立の小・中学校を対象におこなった調査の方法と回収結果の報告をする。「2. 調査結果」では、「仰げば尊し」「蛍の光」の歌われる割合、加えて、それ以外の楽曲が歌われている割合を報告する。合わせて、選曲理由についての報告もおこなう。「3. 考察」では、調査結果を中心に据え、卒業式において「仰げば尊し」を歌うことの意義についてかんがえたい。

1. 調査の概要

1.1 調査の目的

現在の卒業式における国歌・校歌以外の合唱曲の実態把握。

1.2 調査項目

- (1) 「仰げば尊し」を歌ったか？
→歌った場合は「互いにむつみし…」から始まる2番を歌ったか？
- (2) 「蛍の光」を歌ったか？
- (3) (1) (2) 以外の楽曲を歌ったか？
- (4) 式中の歌はどのような理由で選曲したか？

1.3 調査対象

- (1) 母集団 全国の国公立の小・中学校
- (2) 標本数 3869校
- (3) 抽出方法 層化2段無作為抽出法

1.4 調査時期

平成13年4月～17年4月※平成12年度～16年度の卒業式に相当する。

1.5 調査方法

往復はがきによるアンケート形式

表1 都道府県別回収結果

地方区分	都道府県名	実施校数 (小学校)	回答校数 (小学校)	実施校数 (中学校)	回答校数 (中学校)	地方区分	都道府県名	実施校数 (小学校)	回答校数 (小学校)	実施校数 (中学校)	回答校数 (中学校)
北海道	北海道	36	9	70	11		滋賀県	46	10	44	12
東北	青森県	37	8	39	13		京都府	56	13	57	15
	岩手県	36	7	36	7		大阪府	62	10	64	12
	宮城県	32	13	39	15		兵庫県	66	6	70	7
	秋田県	32	9	29	14		奈良県	52	7	52	6
	山形県	63	8	26	10		和歌山県	34	12	34	11
	福島県	40	10	25	11	中国	鳥取県	29	10	32	11
関東	茨城県	34	11	46	15		島根県	41	6	41	7
	栃木県	42	8	26	10		岡山県	24	14	26	11
	群馬県	33	9	40	8		広島県	33	12	68	15
	埼玉県	27	15	56	5		山口県	45	7	46	6
	千葉県	56	7	48	6	四国	徳島県	26	10	37	10
	東京都	36	9	82	12		香川県	28	12	42	9
神奈川県	44	8	47	14		愛媛県	26	9	31	11	
中部	新潟県	43	9	42	9		高知県	39	14	28	10
	富山県	31	14	24	12	九州	福岡県	39	14	52	8
	石川県	45	7	47	8		佐賀県	36	10	29	12
	福井県	36	8	25	15		長崎県	54	12	65	11
	山梨県	30	9	30	11		熊本県	32	11	33	11
	長野県	31	9	45	10		大分県	35	11	35	13
	岐阜県	30	10	38	9		宮崎県	53	12	52	12
	静岡県	36	15	33	12		鹿児島県	66	8	55	9
	愛知県	43	19	31	11	沖縄	沖縄県	43	8	45	17
	近畿	三重県	29	9	40	9	合計		1867	843	2002

1.6 回収結果

- (1) 有効回収数 (率) 1735 校 (44.8%)
- (2) 調査不能数 (率) 2134 校 (55.2%)

1.7 都道府県別回収結果 (表1)

2. 調査結果

2.1 「『揚げば尊し』を歌ったか?」について

全体で見ると、現在の卒業式で歌われている割合は、小学校が 11.1%、中学校が 25.4%、となっている。その中、〈互いに睦みし日頃の恩…〉から始まる 2 番を歌った割合は、小学校が 35.7%、中

表2 全国で見る「仰げば尊し」

地方区分	小学校		中学校	
	仰げば尊し	2番を歌った	仰げば尊し	2番を歌った
北海道	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%
東北	4.7%	66.7%	33.3%	41.0%
関東	18.9%	66.3%	35.0%	60.4%
中部	9.6%	17.7%	15.4%	41.4%
近畿	4.3%	14.3%	20.2%	22.9%
中国	3.5%	20.0%	16.2%	41.7%
四国	16.2%	16.7%	35.9%	20.1%
九州	29.0%	19.7%	50.3%	21.6%
沖縄	13.3%	100.0%	22.2%	75.0%
合計	11.1%	35.7%	25.4%	36.0%

※「2番を歌った」とは、「仰げば尊し」を歌った学校の中、〈互いに睦みし日頃の恩…〉から始まる2番を歌った割合。

学校が36.0%となっている。(表2)

都道府県別に見ると、小学校では、東京都52.9%、鹿児島県52.6%、熊本県42.9%、福井県40.0%、愛媛県40.0%、中学校では、鹿児島県82.6%、福島県82.4%、佐賀県77.8%、群馬県66.7%、宮崎県64.7%、の順で歌われる割合が高い。一方、0.0%が、小学校では、北海道、岩手県、千葉県、神奈川県、新潟県、富山県、石川県、山梨県、長野県、岐阜県、三重県、滋賀県、奈良県、鳥取県、岡山県、広島県、高知県、大分県、中学校では、北海道、神奈川県、山梨県、三重県、滋賀県、京都府、福岡県、となっている。

2.2 「蛍の光」を歌ったか?について

全体で見ると、現在の卒業式で歌われている割合は、小学校が9.7%、中学校が15.0%、となっている。(表3)

都道府県別に見ると、小学校では、鳥取県60.0%、愛媛県53.3%、和歌山県47.1%、東京都35.3%、愛知県31.6%、中学校では、和歌山県68.4%、福島県64.7%、徳島県56.5%、兵庫県53.5%、京都府52.6%、の順で歌われる割合が高い。一方、0.0%が、小学校では、青森県、岩手県、茨城県、

表3 全国で見る「蛍の光」

地方区分	小学校	中学校	地方区分	小学校	中学校
北海道	4.3%	0.0%	中国	14.2%	18.4%
東北	7.9%	18.4%	四国	19.3%	28.2%
関東	8.8%	11.3%	九州	10.1%	14.3%
中部	8.3%	11.0%	沖縄	0.0%	0.0%
近畿	14.5%	33.5%	合計	9.7%	15.0%

表4 よく歌われる合唱曲

小 学 校				中 学 校			
割合 (%)	曲 名	作詞者	作曲者	割合 (%)	曲 名	作詞者	作曲者
25.4%	巣立ちの歌	村野四郎	岩河三郎	44.8%	旅立ちの日に	小嶋登	坂本浩美
16.2%	旅立ちの日に	小嶋登	坂本浩美	24.6%	大地讃頌	大木惇夫	佐藤真
13.8%	さようなら	倉品正二	倉品正二	16.0%	巣立ちの歌	村野四郎	岩河三郎
12.0%	さよなら友よ	阪田寛夫	黒沢吉徳	3.8%	TOMORROW	杉本竜一	杉本竜一
11.8%	ビリーブ	杉本竜一	杉本竜一	2.4%	流れゆく雲を見つめて	松井孝夫	松井孝夫
4.2%	門出の歌	尾原昭夫	尾原昭夫	2.0%	はばたこう明日へ	松井孝夫	松井孝夫
3.8%	さくら	森山直太郎 他	森山直太郎	1.4%	そのままの君で	松井孝夫	松井孝夫
2.0%	ひろい世界へ	高木あきこ	橋本祥路	1.2%	河口	丸山豊	團伊玖磨
1.6%	ベストフレンド	玉木千春	玉木千春	0.4%	春に	谷川俊太郎	木下牧子
0.6%	世界に一つだけの花	槇原敬之	槇原敬之	0.3%	さよならと言おう	西世紀	加賀清孝

※歌われる頻度の高い10曲を表としてまとめた。

栃木県、神奈川県、新潟県、静岡県、三重県、島根県、広島県、大分県、鹿児島県、沖縄県、中学校では、北海道、宮城県、茨城県、栃木県、埼玉県、石川県、静岡県、三重県、奈良県、広島県、香川県、大分県、宮崎県、鹿児島県、沖縄県、となっている。

2.3 「上げば尊し」「蛍の光」以外の楽曲を歌ったか?」について

小学校では、「巣立ちの歌」25.4%、「旅立ちの日に」16.2%、「さようなら」13.8%、「さよなら友よ」12.0%、「ビリーブ」11.8%、中学校では、「旅立ちの日に」44.8%、「大地讃頌」24.6%、「巣立ちの歌」16.0%、「TOMORROW」3.8%、「流れゆく雲」2.4%、の順で歌われる割合が高い。(表4)

2.4 「式中の歌はどのような理由で選曲したか?」について

選曲理由については、「歌詞の内容が卒業式に適したもの」、「卒業生のリクエスト」、「代々歌われている曲(慣例)」、「合唱できる形態を持つ曲」、「教科書に取り上げられている曲」、「合唱コンクールの課題曲」、等の意見が寄せられた。

3. 考察

現在の卒業式では、「巣立ちの歌」(1965)、「旅立ちの日に」(1992)、「大地讃頌」(1962)、といった楽曲が歌われる頻度が高い。その制作年を見ると、3曲全てが戦後の歌であることが分かる。一方、歌われることが少なくなった「仰げば尊し」や「蛍の光」は、明治に公刊された『小学唱歌集』に収録されているので、その歴史は比較にならないほど長く、卒業式とともに、歌い継がれてきた唱歌といえることができる。取り分け、「仰げば尊し」については、小学校が11.1%、中学校が25.4%、の割合で歌われ、「蛍の光」以上に歌われる傾向が高いが、「蛍の光」については、合唱曲としてではなく、在校生の手によるリコーダーなどの演奏（もしくは伴奏のみ）を使用するケースが多い。換言すれば、卒業生（送られる側）の歌としての「仰げば尊し」、在校生（送る側）の歌としての「蛍の光」、ということになる。

さて、「仰げば尊し」の現状を把握する上で、今回のような卒業式に関する調査をおこなう以前に、私に音楽教科書の掲載率とその形態について調査したこと（「試論「身を立て名をあげ」の現在」『言語と文化』2003.3）がある。例えば、平成13年検定の卒業学年が使用する音楽教科書では、「仰げば尊し」の掲載率は8割（4/5）であった。だが、その形態は、本来は全3番まである歌詞の中、〈互いに睦みし日頃の恩…〉から始まる2番が削除され、全2番（本来の1番と3番）の楽曲として、掲載されていた。その理由は、〈「身を立て名を上げ、やよ励めよ」は、当時の立身出世が前面にでており、一人一人が自分の良さを生かして社会に貢献することが求められている現代の価値観と合わない。〉というものである。

このことを踏まえ、今回の調査において、本来の2番を歌ったかどうかについて質問したところ、小学校が35.7%、中学校が36.0%、の割合で歌われていることが確認できた。そうした学校の選曲理由の項を見ると、「代々歌われている曲（慣例）」とする学校が多かったが、中には1番と3番を卒業生が担当し、2番を保護者・在校生・教員が担当する、のような振り分けをしている学校もあった。歌われなくなったものの、「仰げば尊し」が歌い継がれる理由の一つに、参列者全員が参加できる歌詞の構成にあるのではないかと考えられるのである。

「仰げば尊し」の歌詞については、山住正己『洋楽事始』（平凡社東洋文庫、1971）が詳細を明らかにしている。山住の考察によれば、歌詞制作については、大槻・加部厳夫・里見義の合議によっておこなわれ、標題の「あふげば尊とし」については、「あふげば尊し」→「師の恩」→「告別歌」→「あふげば尊し」→「イキル」→「あふげば尊とし」の経緯をもち、2番の歌詞〈身を立て名をあげ〉については、中国古典『孝経』にある〈立身行道挙名後世〉からの借用であることが分かる。また、採用はされなかったが、1番の歌詞「年月」を「文月」の変更しようという意見が提出されていることから、当時の卒業式の時期を考慮すると、卒業式用に「仰げば尊し」が制作されたことも分かる。この標題決定までの経緯を見ると、「仰げば尊し」のテーマは、「師の恩」、「告別」、「イキル」、ということになるだろう。

今回の調査では、卒業式で歌う楽曲の選択理由に、「歌詞の内容が卒業式に適したもの」という意

見が多数寄せられた。そこでは、「未来への希望」「大きく羽ばたいて」のような、卒業生に向けられた教員の祈りにも似た言葉を見出すことができる。そうした思いと、前述した「仰げば尊し」のテーマの間に、そう距離は感じられない。だが、卒業生自身の意識については、明治期と現代とでは、かなりの差があるだろう。現代の義務教育では、ほぼ、自動的に卒業をむかえられるが、明治期の等級制、つまり落第の可能性がある教育制度にいた子どもたちにとって、「仰げば尊し」を歌うということは、卒業することができたということである。「プロローグ」でも述べたように、音楽取調所の第1回卒業生はわずか3名の女性であった。彼女たちが歌った「仰げば尊し」は、参列者全員が参加できる唱歌として現在でもなお、歌い継がれているのである。